

図書館だより

埼玉県立図書館

第 41 号

平成元年10月1日

編集 埼玉県立図書館
広報委員会

発行 埼玉県立浦和図書館
館長 栗藤 一衛
浦和市高砂3-1-22
電話 048(829)2821

芭蕉特集

(主な内容)

- | | |
|---------------------|---------------------------|
| ●第一夜の泊り..... (1) | ●本のひろば..... (5~6) |
| ●奥の細道と埼玉..... (2~3) | ●県内図書館めぐり、読書グループ紹介... (7) |
| ●随筆..... (4) | ●芭蕉アラカルト..... (8) |



(「こよい誰」芭蕉坐像図：江東区芭蕉記念館所蔵)

第一夜の泊り

金子兜太

陸奥へ旅立った芭蕉と曾良の、最初に泊った宿場が、草加なのか春日部(粕壁)なのか、という論議が、いまでも残っているようだ。芭蕉は文中に、「その日やうやう草加といふ宿にたどり着きにけり」と記し、曾良の随行日記は、「廿七日夜 カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余」とメモしている。どっちが正確なのか、というあげつらいである。

埼玉県内の地名についての記述が、これ以外には「栗橋、関所」しかない。で、埼玉県に住む者には興味を呼ぶことだが、私は春日部に手を挙げる。曾良の日記はメモ風に徹底して事実を即しているが、芭蕉の紀行文は、これまた徹底した創作意識に貫かれたものだったからである。芭蕉は到るところで事実を置き換えて、無視したりしている。

草加にしたのも、ここが千住につづく日光街道第二次の宿駅だったからだろう。そのほうが旅のながれが自然になる。旅の第一夜の思いを綴る前後の文章もなめらかになる。

(現代俳句協会会長)

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

「奥の細道」と埼玉

関田 史郎

随行日記

「奥の細道」に登場する埼玉は、たつた一か所だけである。若生（わうせい）で帰らばと定（さだ）まなき頼（たの）の末（すえ）をかけ、其（その）日（ひ）漸（は）草（くさ）加（か）と云（い）宿（しゆく）にたどり着（き）にけり。

れたのである。それによると、
一 廿七日夜、カスカベニ泊ル。
江戸ヨリ九里余。
一 廿八日、マ、ダニ泊ル。カスカベヨリ九里。（中略）此日、栗橋ノ関所通ル。
などと記されており、紀行第一夜の宿泊地は草加ではなく、粕壁いまの

草加に着いたという件りである。

元禄二年（一六八九）、松尾芭蕉が門人河合曾良を伴って千住を出発し、日光街道を下って、草加に着いたのが三月二十七日、今の陽暦にすると五月十六日である。

この原文にだけ即してみるならば、その日芭蕉と曾良は、草加に泊ったということになる。其（その）日（ひ）ようようたどり着（き）にけり」という言い方は、泊（と）つたと書いてなくても、その事が含まれていると思うのが、普通であろう。

ところが、昭和十八年、同行した曾良の「随行日記」が発見、紹介さ



(東陽寺)

春日部市だったことが明らかである。この日記は、旅の実際の行程、動静などの参考として、山本六子氏が紹介したもので、信頼性の高いものである。

カスカベニ泊ル

芭蕉は、深川から千住までは船を使い、巳（う）の下刻（午前十一時ごろ）船から上（あ）り、歩き始めたのであるから、千住から草加までの二里余（二里）は、あまりにも早く泊り過ぎる。それに、翌（あ）二十八日は、間々田に泊っているの、草加からでは十三、四里も歩かねばならず、無理な行程になるのではない。

芭蕉は、この旅では一日平均九里余を歩いており、粕壁から間々田までの九里を歩いたとみるのがよく、曾良の日記通り、カスカベに泊ったとするべきであろう。

草加の記述はなぜか

それでは、どうして芭蕉は、草加泊りのごとき印象を与える文章にしたのであろうか。

これについては、諸説あつて、定説をみていないが、そのうちのいくつかを紹介してみる。

その一つは、芭蕉の記憶違いであ

ろうとする考え方である。芭蕉は、他のところでも思い違いをしているから、その一つであろう。「其（その）日（ひ）漸（は）草（くさ）加（か）と云（い）宿（しゆく）にたどり着（き）にけり」という早加が粕壁でも間々田でもたいては変わりはない。草加の土地の説明は一語もないから、芭蕉はたまたま粕壁を草加とまちがえて書いたのだらう。（井本農一氏）

しかし、江戸に住んだ彼が誤るはずはなからう。（山崎喜好氏）

この時芭蕉は四十六歳。これを記した時は、最も降（ふ）って考えても元禄七年であるから、早老の彼でも、数年前の記憶を喪失（そうしつ）してしまうほど老（よ）碌（ろく）していたとは考えられない。旅行中のメモもあつたらうし、曾良の助言を求められたであろうから、記憶違いではないのではない。（小島吉雄氏）という反論もある。

また、旅路の労苦（ろうく）を強調し、「草臥（くさび）て宿（しゆく）かるころや藤（ふじ）の花（はな）」の句のあたりの姿を登場させて、草加には草臥（くさび）をひびかせたものであるとする虚構（きこく）説（志田義秀氏、同延義氏）。

「行道（ぎやうだう）なをす、まず」や「瘦骨（しゆくこつ）」という前後の文に照（あ）らされる為（ため）に、粕壁より近い草加に泊（と）つたことにした（小島吉雄氏）。

麻生磯次氏は、瘦骨以下の文は草

加の宿をさまよい歩いている状況だとし、「たどりて」（曾良本）を「たどり着（き）にけり」と推（お）し進（すす）めたため、草加に一泊したような印象を与えることになったが、芭蕉はここであえて作（さ）をしようとしたわけではなく、強い表現を工夫した結果（けつ）だといふ。

また、松本義一氏は、「早加と云ふ宿にたどり着（き）にけり」とは書いてあっても、草加に泊（と）つたと書いてあるわけでもない。草加泊りのような印象を与えて前後の趣（おもむ）をかき立てる芭蕉の技巧（ぎこう）のあざやかさ（あざやか）を見るべきであるといふ。

それぞれの説があつておもしろいが、これらの説を追（お）究（きゅう）していくと、否（いな）応（おう）なしに「奥の細道」とは、いふところの紀行文（きぎぶん）なのか、あるいは、もつと違（ちが）つたものなのかという疑問（ぎもん）に突き当たるのである。

芭蕉の紀行文観

芭蕉の紀行文についての考え方を知るものとしては、「笈（き）の小文（せうぶん）」に有名な一節（いちせつ）があるが、大意（だいい）つきのようである。

わが国の代表的な紀行文「土佐日記」「東関（とうかん）紀行」「十六夜（いざよひ）日記」があるが、旅（たび）の情趣（きんしゆ）がすぐれた文章で書かれて以来、その他の紀行文

泊つたところは

泊（と）つたのがカスカベとすると、宿所（しゆくしよ）はどこであらうか。

「随行日記」にも、他の文献（ぶんげん）類（るい）にも、その宿（しゆく）は書かれていない。いま、春日部市内（かすかべし）に、二、三の候補地（こうほち）が挙げ（あ）げられているが、いずれも言い伝えや推測（すいそく）である。

その一つに、小淵（こぶち）の観音院（くわんおんいん）がある。四号国道沿（ぎやうこくどう）いで、新町橋（しんまちばし）から北へ八〇メートルほどである。元禄二年（げんろく）の創建（けんけん）といわれる山門（さんもん）は、屋根

柱（はしら）などいたみが甚（は）しく、辛（くる）うじて支柱（しゆくちゆう）によつて支（さ）えられている。山門（さんもん）の仁王像（にわうざう）も、一（ひと）体（たい）は両腕（りやうわん）とも欠（か）け落（お）ちている。山門（さんもん）をくぐると、本堂（ほんだう）があつて、本尊（ほんそん）の観音像（くわんおんざう）が祀（まつ）られている。本堂（ほんだう）の前（まえ）の二基（ふたき）の燈籠（とうろう）があつて、右（みぎ）に宝暦五年（たうりき）（一七五二）七月、左（ひだり）に貞享四年（ていかう）（一六八七）丁卯（ていぼう）と刻（き）まれている。



(観音院)

ここは、正嘉五年（しんか）（一二六一）の開基（かいき）と伝えられ、京都（きやうと）聖護院（せいごいん）の直属（ちくじく）で、江戸時代（えどじだい）は修験（しゆげん）の道場（みちば）だったらしい。ここに特筆（とくへき）すべきは、聖（せい）観音（くわんおん）、不動明王（ふどうめいおう）、毘沙門天（びしゃもんてん）、蔵王権現（ざうわんけんげん）、役行者（やくぎやうぎやう）などの七体（しちたい）の円空（えんくう）仏（ぶつ）の傑作（かくさく）が、保存（ぼぜん）されていることである。

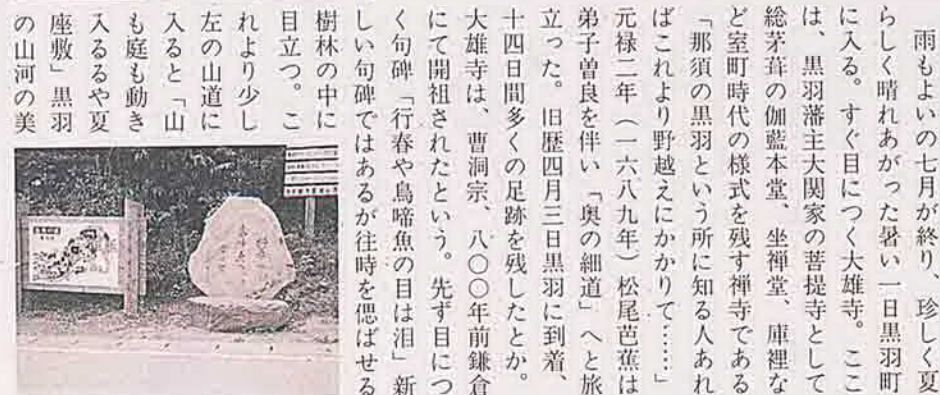
著者プロフィール

昭和四年（しやうわ）埼玉県（さいたまけん）久喜市（くきし）生まれ。早稲田大学（わせだ）卒（そつ）。出版社（しゅっしや）教職（きやうしやく）、県立図書館（けんりつとしゆかん）勤務（きんむ）などを経（へ）て、現在（げんざい）、鷺宮（さぎや）小学校（しょうがく）校長（けいざん）。

歌誌（かし）「塔（た）」編集人（へいしん）を経て、現在（げんざい）「白樺（びやく）」主筆（しゅへき）。「瀧（たに）」同人（どうじん）、サンケイ新聞（さんけいしんぶん）文芸（ぶんぎ）ひろば（ひろば）選者（せんしや）。著書（しやくしよ）「埼玉（さいたま）の文学（ぶんがく）めぐり」、「文学（ぶんがく）で歩く（ある）ふ」と、歌集（かしふ）「風影（ふうえい）」など多数（たうすう）。

奥の細道紀行

黒羽町周辺の句碑を訪ねて



雨もよいの七月が終り、珍しく夏らしく晴れあがった暑い一日黒羽町に入る。すぐ目につく大雄寺。ここは、黒羽藩主大関家の菩提寺として総茅葺の伽藍本堂、坐禅堂、庫裡など室町時代の様式を残す禅寺である。「那須の黒羽」という所に知る人あればこれより野越えにかかりて……」元禄二年(一六八九年)松尾芭蕉は弟子曾良を伴い「奥の細道」へと旅立った。旧暦四月三日黒羽に到着、十四日間多くの足跡を残したとか。大雄寺は、曹洞宗、八〇〇年前鎌倉にて開祖されたという。先ず目につく句碑「行春や鳥啼魚の目は泪」新しい句碑ではあるが往時を偲ばせる樹林の中に目立つ。これより少し左の山道に入ると「山も庭も動き入るや夏座敷」黒羽の山河の美しさを現わしている。

下って国道294号線に出る。山裾に「田や麦や中にも夏のほととぎす」萩の花、水引、山百合などに囲まれ思わず一句浮びそうな腰掛まで用意されている。少し上り坂に黒羽城跡の苦むす石垣の辺りは、芭蕉の広場とされ「鶴鳴や其声に芭蕉やれぬべし」の句碑。那珂川に添い山の緑を楽しみつつ山道をドライブ、真夏のすみわたる青空を眺めつつ約二十分、三〇〇年から五〇〇年位経ったと云われる杉木立に囲まれ、八溝山地のふところ、溪流を朱塗の橋にて渡り、直線にそそり立つ石段を登ると東山雲巖寺である。正面に釈迦堂、獅子王殿が一直線に並ぶ代表的な迦藍配置である。辺りは降るばかりの蟬しぐれ、清らかな溪流、そして五〇〇年からの歴史を物語る杉木立、思わず背筋の冷たくなるような荘厳さである。一二六六年夏元和尚の開基と伝えられる。芭蕉は、元禄二年に黒羽藩家老浄法寺桃雪師を頼り二週間の滞在をしている。山門右には「震巖寺専門道場」左には「臨濟録提唱」偏額には「神光不昧」と、それぞれ人を圧す大文字が掲げられている。芭蕉が参禅の師と仰ぐ仏頂和尚の山居跡があるのにひかれここを訪ねたといわれる庭内には「たて横の五尺にたならぬ草の庵むすぶもくやしあめなかりせば」仏頂禅師、木啄も庵はやぶらず夏木立」芭蕉のそれぞれの句碑が目立つ。

折から若い寺僧が鐘楼にてつく鐘の音が辺りのしじまを破る。寺には午前四時頃の暁鐘、午後三時の放参鐘、午後六時三十分頃の昏鐘と各三首づつ時を知らせる鐘の定まりがあるという。昔芭蕉は裏山の絶壁で荒行をつむ修行僧をみて、きつつきも……の句をよんだといえられているとか。また、黒羽入りする際馬子の孫娘がさねが二人を慕ってついて来るのを「かさねとは八重撫子の名成るべし」と曾良が少女の優雅さと純情をうたったともいう。この道の端、常念寺には「野を横に馬牽むけよほととぎす」の句碑がある。

●休館(特別整理期間)のお知らせ 県立浦和図書館・10月16日～25日 県立熊谷図書館・10月16日～31日

本のひろば

『奥の細道』資料案内

『おくのほそ道』 53丁 活字二段組本ならばわずかに20数ページの小文であるが、その注釈書、解説書、現代語訳、紀行ガイド等のおびただしい数を見ても、往時よりいかに多くの人々の心をゆさぶり続けているかがわかります。

今回、県立四館所蔵資料のうちのいろいろなジャンルから、ごく一部を紹介いたします。記載は、書名、著者名、出版者、出版年、所蔵館、概容の順となっています。

●辞・事典、目録類

奥の細道総索引 井本農一、原岡秀人共著 明治書院 '62 (浦・熊)

素龍清書本を底本に曾良本と柿衛本との異同を示し、又全用語の単語別索引を収録 詳考 奥の細道 増訂版 阿部喜三男著 久富雄雄増補 日栄社 '79 (川)

原著の修訂復刻に久富氏が昭和34年以降

の新説・文献をくまなく渉猟し、現在までの諸説を網羅した、文献一覽の力作であり、奥の細道の百科全書である。

芭蕉記念館所蔵資料目録 第1集 江東区芭蕉記念館 '83 (川・久)

昭和56年開館以来 購入、寄贈及び寄託を受けた芭蕉関係、俳句・文学関係等の古文書・掛け軸・短冊・書簡を含む目録。

芭蕉コーナー目録 第一版 草加市立草加図書館 '89 (浦・熊・川)

平成元年2月現在の草加図書館所蔵の四百九十二冊の五十音順書名目録。

芭蕉事典 桜木俊晃著 青蛙房 '63 (浦)

発句、蕉風俳諧、俳諧理念、語録、評語、門弟等を事項人物編として編集解説。他に小伝、書誌編、書簡編、略年譜を付す。

芭蕉事典 松尾靖秋ほか編 春秋社 '78 (浦・川・久)

生涯・作品・書簡・俳論・先行文芸との関係・周囲の人々・後代への影響・生活・芭蕉像・芭蕉の筆跡・文献解説、の11部により芭蕉のすべてを解説した体系的辞典。

芭蕉辞典 飯野哲二編 東京堂出版 '59 (浦・熊・川)

全作品にわたって、わかりにくいもの、重要なものの語句・語彙・発句等に注解を施し、芭蕉俳論の特質を解明した芭蕉解説研究ハンドブック。研究文献・関係書解題と翁一代の詳細な年譜を付載する。

●影印、注釈書類

おくのほそ道 杉浦正一郎校注 岩波書店 (岩波文庫) '67 (浦・熊・川)

素龍筆芭蕉所持本(西村本)―芭蕉が自筆稿本を素龍に清書させ、自分の所持本としたものを底本とする。

おくのほそ道 岡田利兵衛編 新典社 '69 (熊)

素龍筆別本(柿衛本)―西村本より仮名表記多く、かなりの異同もあり―のコレクタイプ版による影印本。

おくのほそ道 付 奥細道菅菰抄 荻原恭男校注 岩波書店 (岩波文庫) '79 (浦・熊・川・久)

武蔵児玉出身の菅笠庵一による「奥細道菅菰抄」(七七八年刊)は「おくのほそ道」の注釈書として二番目に古く、板本としては最古で、かつ最も流布した。実地踏査と百二十三部の書物からの博引旁証により、細道注釈の基礎となった。

おくのほそ道 板坂元、白石佛三校注・現代語訳 講談社 (講談社文庫) '79 (久)

難解な古典を容易に親しめるように工夫し、現代の読書向けに表記を改め、詳しい脚注、補注に現代語訳を付す。巻末に近代諸家によるゆかりの紀行文、随筆を収録。

おくのほそ道―野ざらし紀行・幻住庵記― 吉江久弥編・勉誠社 (文芸

文庫 日本古典文学) '82 (浦)

井筒屋本(素龍清書本を底本とするが、素龍の跋は省かれ別紙に奥書が加えられている。元禄十五年京都井筒屋庄兵衛による最初の刊本)による「おくのほそ道」他二編。

おくのほそ道 安東次男著 岩波書店 (古典を読む) '83 (浦・川)

素龍清書本をテキストにして、俳諧の一体として、あたかも連句を読むがごとく本文について注釈を施す。

校本 芭蕉全集 第6巻 角川書店 '62 (浦・熊・川)

紀行・日記・俳文篇 井本農一、弥吉菅一による校注 素龍清書本によるが、脚註に曾良本、柿衛本との異同も併せる。第10巻には俳書解題、総合索引、明治以降芭蕉研究書目録を収録。

芭蕉紀行文集 八木書店 (天理図書館善本叢書叢書之部 第10巻) '73 (浦・熊)

曾良本(定稿以前の芭蕉草稿を曾良が筆写したもの。見せ消ちや、定稿による加筆訂正が施されており推敲過程を知ることが出来る)、去来本(芭蕉没後遺言により、その所持本を譲り受けた去来により書写された芭蕉の兄半左衛門に贈ったもの)系統の下郷本の影印。宮本三郎による解説。

づくりや地域文化の振興、アイデンティティの醸成など市民文化創造のエネルギーの一つにしたいとはじまったのが奥の細道を中心とするまちづくり……。

今日では、奥の細道国際シンポジウムをはじめ芭蕉植物園、芭蕉ツアール、俳句大会、芭蕉塾、百代橋の架



芭蕉の紀行文『奥の細道』の第一夜の段は「その日ようよう草加という宿にたどり着きにけり……」ではじまっています。

日本の三大古典といわれる奥の細道の中に「草加」の二文字が記されていることは、たとえ虚構性であるにせよ私達草加市民にとって貴重な財産です。この地域資源を今日の課題である生涯学習時代のきっかけ

『奥の細道』の 情報発信基地をめざして 草加市立草加図書館



橋、市民団体による芭蕉像の建立等数々の施策を展開しております。

図書館では、62年度から芭蕉コーナーを設けて紀行文や芭蕉研究、伝記などを収集、63年度末五三五冊を数えています。今後は映像ものも検討中であり、奥の細道を中心とした情報発信基地をめざしています。また、こうした収集は、郷土資料、水のコーナーと並んで草加の特色ある図書館づくりの一つとなっています。

ご利用は、芭蕉コーナー目録を公立図書館に配布済みですので、リクエストしていただければご要望にお応えします。近隣の方は直接どうぞ（所在地）草加市松江町四八番地（電話）〇四八九―三六九四五一（開館時間）9時～17時（休館日）火、月、祝日、ばく書期、年末年始

最近では、グループ独自の埼玉近辺を史蹟めぐり、グルメ旅行、会員同志の生活の知恵を持ちより、病気に対

昭和五十六年二月「きさらぎ」と名を決め、私達のグループは始まりました。テレビの画面に目だけ奮われている現代生活より、活字に依って自分の心の中に夢をはぐくみたいとの願いもありました。

月一回第一火曜日午後二時より例会を開き、グループの親睦、家族の話題、町内の動き方等女性らしくきめこまかい話題をはさみながら、読んだ本の内容を交換し次に読みたい本を借り出し、熊谷市読書連絡協議会からの連絡事項を伝えたり、また年間の催しである史蹟めぐりへの参加、著者を囲む会等積極的に協力し会員一人一人が少しでも前進出来るよう努力しております。

読書グループ の紹介

きさらぎ

熊谷市



する対応、老人問題などの参考資料等内容が豊富で二時間の予定時間が足りないくらいです。本は時には、県立図書館にお願いして全員で一冊の本を読み感想を話し合ったり感激し合ったりしたものです。

月一回の交換の日には、各自の好みの著者を選んでおります。杉本苑子、宮尾登美子等女流作家の物が圧倒的に多いです。読破した本の冊数はおどろくべきものです。

平均年齢も上まわるこの頃なので、お互い健康に気をつけて今後も活字を友として楽しいグループを続けてゆきたいと思っています。

〔著者を囲むつどい〕10月14日13時半・日色ともゑ・児玉町民体育館（照会・県立熊谷図書館）

●研究書類

●研究書類
頼原退蔵著作集 第9・11巻、芭蕉中央公論社 '80 (浦・川)
学者としての精緻な考証と詩人としての冷徹な眼光をもって俳聖の人間像とその作品、時代との関連を探る。
奥の細道随日記 河合曾良著 山本六丁子編 小川書房 '43 (熊)
「奥の細道」研究に没頭を投じた書。
「おくのほそ道」とその周辺 金沢規雄著 法政大学出版局 '64 (熊)
地方史的興味に立脚しつつも研究史には欠かせない新発見資料の復刻と解説も収録。
「おくのほそ道」入門 平井照敏著 永田書房 '88 (川)
芭蕉の旅路の跡をたどりつつ、独自の視点から平明に解説した入門書。
奥の細道ノート 萩原井泉水著 新潮社 (新潮文庫) '70 (熊・久)
著名な芭蕉研究者でもある著者の詩人としての視点でみた解説、俳聖の生涯と人生観を語る。
ことばの内なる芭蕉 乾裕幸著 未来社 '81 (川)
「おくのほそ道」の虚構、ドキュメンタリー性を求める紀行文文学との対比の考察。
天気図おくのほそ道 吉成邦雄著 和泉書院 '87 (川)
元気象台長がその知識と経験を生かし、季節の推移に焦点を当てつつ真実を求め、

おくのほそ道の中の季語に虚構はいると実証する研究書。
俳句の本質 金子兜太著 永田書房 '84 (川)
直かの眼「おくのほそ道」以後の芭蕉透徹した思索、詩趣るたかる筆致による。
芭蕉 I・II 有精堂 (日本文学研究資料叢書) '77 (浦・熊・川)
奥の細道の構想、奥の細道考「市振の」「開闢」について、成立に関する一試論、もう一つの細道「芭蕉と歌枕」についての試論、奥の細道と名所和歌集、登場人物の虚名ほか芭蕉研究参考文献の集大成。
芭蕉の作品と伝記の研究 村松友次著、笠間書院 '77 (川)
通説に対する多くの仮説を提示、芭蕉忍著説など綿密な考証から導き出された刺激的な結論は、独特の「細道」裏面史を描く。
芭蕉必携 尾形仿編 学燈社 (別冊国文学 No. 8) (川)
芭蕉俳論事典、芭蕉表現事典、年譜、文献解題を中心とする入門書。
芭蕉論 上野洋三著 筑摩書房 '86 (川)
「奥の細道」論、本格的な旅日記検討の嚆矢といえる。
芭蕉物語―蕉風の人と詩の全体像をさぐる 白石悌三、乾裕幸編 有斐閣 (有斐閣ブックス) '77 (久)
入間書の休載をとるが、多様な文学世界

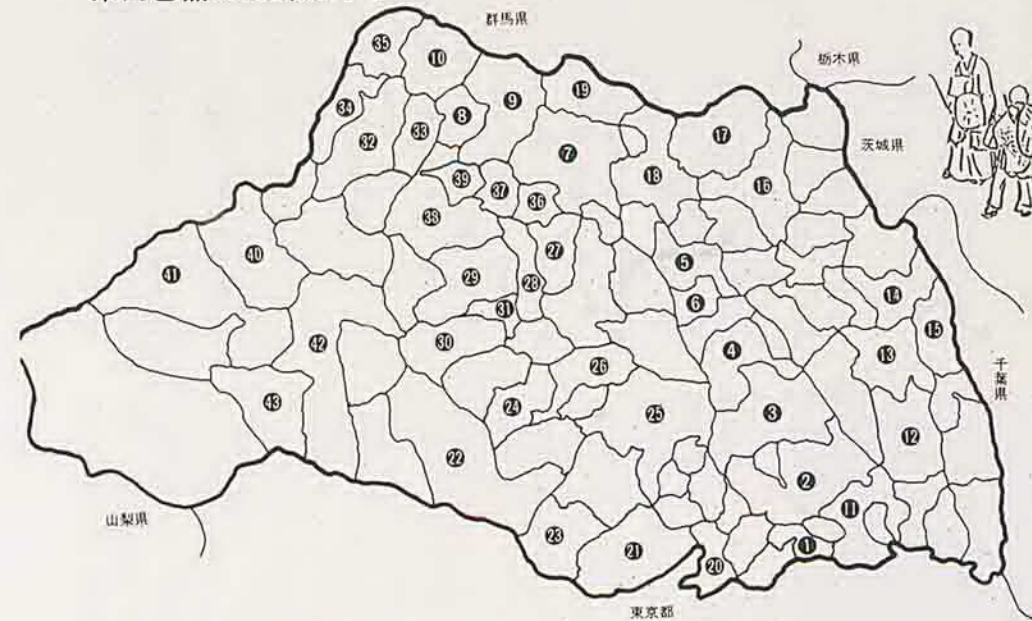
を19名の研究家が事件、代表句から展開。
●紀行文、エッセイほか
「奥の細道」を歩く 山本脩著 柏書房 '82 (浦)
芭蕉の当時を偲び全コースを徒歩で辿る。
「奥の細道」を歩く事典 久富哲雄著 三省堂 '87 (川)
芭蕉の足跡をたどろうとする人々のための案内書。詳細な地図により、どこに何があるのか、目的地に行くにはどう行くかを示す。資料編に句歌碑、文学碑一覧を付す。
奥の細道画巻 与謝蕪村筆 岡田利兵衛解説 豊書房 '73 (熊)
奥の細道吟行 上・下 加藤楸邨著 平凡社 '74 (熊・川)
芭蕉の足跡を辿りその句や文に自作を加えた新田稿をまとむ、歴史と文学の旅。
おくのほそ道行 森本哲郎著 笹川弘三写真 平凡社 '84 (川)
毎年のように「奥の細道」を旅する写真家の案内による現代の芭蕉の旅のエッセイ。
芭蕉おくの細道の植物 廣江美人助著 有明書房 '73 (川)
原典を辿り文学・植物学の両面から解説。われもまたおくのほそ道 森敦著



日本放送出版協会 '88 (川・久)
NHKテレビ番組を担当した著者が綴る。
おくのほそ道とは何か 学燈社 (国文学 解釈と教材の研究 通巻四九七号) '89 (浦・熊・川)
研究の現在―主要参考文献紹介ほか17篇。
芭蕉 漂泊の詩人 平凡社 (別冊太陽 37) '81 (浦・川・久)
古文書・短冊・色紙等に現れる肖像・直筆が数多くのカラー写真により語る。
●16ミリフィルム
奥の細道の世界 学研 '84 カラー36分
門弟曾良と共に東北・北陸と旅し、その想いを綴った「奥の細道」の世界を映像によりとらえ、芭蕉の人間性について描く。
芭蕉 教育映画配給社 '78 28分 (川)
旅を修練の場として俳諧の道一筋に生きる芭蕉にまつわる遺跡や、旅の風物を通して俳句を紹介しながらその生涯を描く。
深川芭蕉庵 毎日映画社 '81 カラー130分 (浦)
俳諧の世界に生き旅の生活を送った芭蕉の生涯を、彼の人生に幾度かの転機を与えた深川芭蕉庵を中心に描く。企画・江東区松尾芭蕉 東映 '78 カラーアニメ11分 (川)
俳諧に高い芸術性を与えながらなお新しい可能性を求めて旅立つ芭蕉像。小学生向。

〔本を読む県民のつどい〕11月7日13時・五木寛之・寄居町中央公民館（申込み・県立熊谷図書館）

県内芭蕉の句碑めぐり



芭蕉アラカルト

- ① 観音寺・戸田市
- ② 土肥家・浦和市
- ③ 江原家・大宮市
- ④ 椿堂・上尾市
- ⑤ 勝願寺・鴻巣市
- ⑥ 榎堂・北本市
- ⑦ 石上寺・熊谷市
- ⑧ 馬場跡・岡部町
- ⑨ 住吉神社・深谷市
- ⑩ 産泰神社・本庄市
- ⑪ 本行寺・川口市
- ⑫ 西教院・越谷市
- ⑬ 観音院・春日部市
- ⑭ 浅間山・杉戸町
- ⑮ 不動堂・庄和町
- ⑯ 総願寺・加須市
- ⑰ 薬師堂・羽生市
- ⑱ 昭若寺・行田市
- ⑲ 聖天院・妻沼町
- ⑳ 鬼鹿毛・新座市
- ㉑ 山口観音



同図書館では、10月11日から12月27日まで開く展示会「多和目の俳人、曾木をめぐる人々」で一般公開する。

芭蕉の直筆の懐紙見つかる！

「芭蕉句碑を歩く―埼玉の104基―」小林甲子男著より）
 坂戸市中央図書館で10月公開
 芭蕉の直筆と思われる文書が発見されたのは、同市多和目の関田兼次郎さん方。「奥の細道」に収められている「笠島」の下敷になった文章ともみられている。

江東区芭蕉記念館
 芭蕉関係および俳文学関係などの資料を収集、保管、展示。資料は一五〇〇点保存。句空宛書状「枯枝に」、句短冊「辛崎の」、句短冊「一日にも」、句扇面「芭蕉遺愛の石蛙（伝）」などがある。またほかにも英一蝶や与謝野蕪村らによって描かれた芭蕉像などを所蔵している。
 ●所在地 千135・江東区常盤一六―三
 ●電話 〇三六三一―四四八
 ●交通 JR・両国駅から徒歩15分
 地下鉄新宿線・森下駅から徒歩7分
 ●休館日 月曜、年末年始
 ●料金 大人一〇〇円、小人五〇円

編集後記

松尾芭蕉が「奥の細道」の旅に出てから今年三〇〇年。ゆかりの各地でイベントの話題も多く、「奥の細道」ブーム。各県立図書館にも、関係資料の問い合わせが目立っています。
 本号のテーマは、「奥の細道」。
 巻頭は、俳界の第一人者金子兜太さん（熊谷市在住）主題は、郷土文学研究者の関田史郎さん（久喜市在住）いずれも、旅の第一夜の宿泊地―草加・春日部説を論じられ、春日部に軍配をあげています。
 施設紹介は、奥の細道の情報発進基地をめざす「草加市立図書館」と、芭蕉の資料で有名な「江東区芭蕉記念館」。表紙の写真「芭蕉坐像図」の掲載では、両館にご協力をいただきましたことを付記し、お礼申し上げます。
 読書の秋。古典文学をお楽しみ下さい。